
月見草

慧都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月見草

【Nコード】

N4224D

【作者名】

慧都

【あらすじ】

幻だったのかもしれない・・・でも私は、確かにあなたに恋をしていました。。。言葉は、かわせなくても心はきっと・・・

あの夏は何処にいったんだろう？
多分 私の心の片隅にだけ。。。
そつとしまつてあるのかもしれないね。。。

大人になった今でも 私を忘れない。。。
あなたが ここにいたことを。。。

りんりんとかわただしく鳴る電話に
ママが 飛びついた

驚きと放心そして。。。諦めの軽いため息と
短い会話。。。。

叔父がたおれたのだ。。。。

何を持っていくかなんて考えられないくせに
必死に何かをたぐりよせるママ。。。。

2人で病院へと向かう。。。。

ママが自分が抑えられず 緊張感で話続ける
私には ただうなずくことしかできない・・・。

いつも叔父の文句ばかりだったのに。。。。
愛していたんだと痛いほど感じる

ほんの20分程度のドライブが
何時間にも感じだしたところ

ママの運転する車わやつと病院についた
不安でこわばるママの横顔

見ているのも苦しい
押し殺した切ない声で ママが言う

「病室にいつてくる！
あなたわここにいて」

私わ1人病院の診察が終わって静かになった
待合室の長いすに座ってただうなずくしかできなかった

1人になって不安でいっぱいな私の目の前に
小さな小窓から
光が差し込んでいた。。

ん・・・
光の中に車いすがゆっくり動いてきて
まるで光の階段を昇っていきそうなあなたがいた。。
私わあなたに目を奪われて
息をするのも忘れてしまっているように
じっとみつめていた

ろうそくのような青白い顔をして
窓の外を切ない目でじっとみつめていた
私わあなたの見つめている
何かが知りたくて
ただ知りたくて。。 あなたの隣まで
まるで夢遊病者のように歩き出していた
並んで見た窓の外にわ
青くどこまでも歩いていけそうな海・・・
私もただ並んでじっと見つめていた

どれくらいのがたったのだろうか？
ママの

「帰ろう。」

という短い問いかけで

私われに返った

もつとここにいたい。。。。

そんな気持ちをその場に置き去りにして

走ってママのところに向かった

帰りの車」の中

ママの赤くなつた目が私をみつめ

「あのね。。。おじちゃん助かったの。」

二人とも嬉しい筈なのに。。。

声を上げて泣いた

叔父がこの世からいなくなってしまう怖さと

生きていてくれる喜びの入り混じったしよっぱい涙だった

車がゆっくりと走り出す。。。

ママわ彼のことをきこうとわしなかった

私も話すことができなかった

だって、何も知らなかったから。。。

次会える保障もなかったし。。。

ただ・・・言葉もないままだったのに

不思議とずっと前から知っているような

不安で押しつぶれそうだった私が

すべてが夢であるように安心していただけ

またきつと会いたいと願っていた

叔父が奇跡的に回復したことで。。。

ママ達兄弟が交代で病院にお世話をしに行った。

いつしか私わいつママの当番がくるのか気になって

学校から走ってかえるようになっていた

病院にいったらまたあなたがあの場所にいるような気がして。。

何でだろう？

1回しか会っていないのに

あの切ない横顔が忘れられなくなっ

気になってしかたがなかった。

もつとずつと隣でただ窓の外と一緒に見ていたかった。

何であんなに切ない顔をするんだろう？

何で窓の外をつめているんだろう？

何で車椅子にのっているんだろう？

幼かった私に知りたいことだらけだったけど

全てを口にすることわ最後までできなかった。

あなたと出会って4日後

チャンスがやって来た。

ママが朝から病院へ行くからといって

忙しく家事をこなしていく

私わママに

「私も病院に行くから、学校から帰るまで待ってて。急いで帰るから。。お願い。。。」

何度も頼んで

ママの了解をとりつけた。

その日の授業わてにつかなかった。

ただあなたに会いたくて。。ただあの場所にいきたくて。。

長い長い学校での授業が終わると友達の呼びかけにも

答えることなく走りはじめていた

「どうかママが待っていてくれますように。」

ただ呪文のようにその言葉を心の中で繰り返しながら

10分くらいの道を必死で走った。

自分の家が見えたとき。。。

ママの真っ赤な車が車庫に止まっていたのを見つけて
体中の力が抜けていくのを感じた

良かった。。。

本当にほっとしている自分が何となくおかしかった。

ママとの会話」もそこそこに

カバンを部屋に放り投げ急いでしたくをした

何も持つものなんかないくせに

あめを2個ポケットの中に忍ばせながらつつい笑い顔になる私わ

不謹慎だったんだろ。。。

そんな私をママも笑顔で待っていてくれる

こないだ泣きはらした顔が嘘ののように。。。

たった4日前窓の外の海を眺めるよゆうなんかなかったのに。。。

今日わすぐく海がきれいに思える

海辺でそだった私わ

海が大好きで浜が庭のようだったせいか

まるでちび黒サンボのようだった。

あなたとわまるで正反対な私が今あなたを探しにいつていることな
んか

しるよしもなかったんだろうな。。。

ママと今日もいい天気だと話し

海が綺麗だと話し

叔父が回復して良かったと話したところ

車が病院についた

こんなに待ち焦がれたはずなのに
いざ病院につくと。。。

不安になる

会えるんだろうか。。。

なんて声かけたらいいんだろうか。。。

いろんなことが頭の中をよぎる。。。

病院の待合室でママと別れた

こないだと違うのわママわ病室においでといったのに
私が断つてこの場所に居たいんだといったこと。。。

ママわちよつと考えていたけど

娘のわがママを許してくれた。

ママの姿がみえなくなつてすぐ

あの窓に急いだ。。。

いない。。。

当たり前なのかもしれない

いつもこの場所に居るわけがない

しばらくその場をうろついていたけどあなたがくる気配さえも
感じられないことにがっかりしていた私に

どこからかきこえてきた声

「いないなら 探してみたらいいじゃない！」

あなたがこの病院のどこかにいるときめつけて

私わ病院内を歩き出した

確か車椅子わこつちからきたから。。。

もう夢中で病室を1箇所ずつ覗き込んでわまた次の部屋へ。。。

何かにとりつかれたように

ただあなたが探した冷房がきいているはずなのに

いつしか私わ汗だくになつて

もしかしたらもうあなたがこの病院から退院したのかと

諦めだしたそのとき

見つけた。。。

あなたわ真っ白な病院の真っ白なベットで

この前と変わらないどこか寂しげな何かを諦めたような顔で
大きな窓の外を見つめていた

私わあなたに近づけなかった

あんなに会いたくて仕方なかったのに

あなたをみたたん汗を拭くことも忘れて

ただあなたの病室の入り口で立ち尽くしていた

病室の入り口にわきつとあなたの名前が書いてあったんだと思うけど

そんなことどうでもよかった

ただそこにあなたがいてくれたことが嬉しかったから

しばらくあなたを見ていた私が

ママの呼ぶかすかな声にきずいたのわ

どれくらいたつてからだったんだろう？

振り返ると私を探して歩き回ったらしい疲れた小さいママの姿があった

今日も離れがたい気持ちのまま

一言もはなせないまま

その場を離れることになってしまった

でも何故かちよつとだけ嬉しかった

あなたがここにいてくれるようで

ここにいてよって言うてくれたように感じたから

次わいつ会えるかな

ずっとそんなこと思つて車に乗り込む私にママが言う

「何だか楽しそうだね」

そんな顔してたのか私にわからなかった。

でもなんらかの満足感みたいなものが私の中にあるのわ本当だった
きがする

今病院を後にしたばかりなのに
もう病院に行くことばかりが頭に回っている
この次あつたらこうしようこんな話がしたい
そんなことばかり考えていた

なんとなくママも叔父とわ別のところに
私の病院に行きたい理由があることわかっていられるらしく
苦笑いしながら次の病院行きの予定を教えてください
3日後だ。。。

たった3日が待ち遠しい。。。。
毎日どうしたらあなたと仲良くなれるか考えた
何て話しかけたら良いか考えてシミュレーションしてわ
おかしくなつて笑っていた
私わあなたの迷惑なんて考える余地もなく
ただただ自分の思いだけで突き進んでいた

3日がやつと過ぎてくれて
またあなたに会えることで嬉しさが抑えられない私が
ママと病院に着いて

上の空でママと別れた後あなたの病室に向かおうとしたとき
息をのんで足が動かなくなつた
あの場所にあなたがいたから
最初に見たときと同じく

窓の外を青白い諦めたような顔でじつと見つめている
ほんの少し前のことなのに
懐かしいようなへんな感じがして
私わ吸い寄せられるように
あなたの隣に歩いていた

もちろん3日もかけて考えた言葉も質問の数々も

全て頭の中にわなくなっていた
ただただ空っぽの私があなたの見つめている何かを
知りたくて

車椅子の後ろに回りあなたの真似をして窓の外の手を見る
あなたが海を見ていたのかわ

今でもわからないけど。。。

しばらく見てるうちに

私わふと思った

あなたがいつもこの病院の狭い世界で暮らしていて
本当わ外にいきたいんじゃないかなと。。。

私わ外で走り回るのが好きな活発な子だったので
きつとあなたもそうしたいんじゃないかなって思ってしまった。
希望と現実が伴わない人がこの世に沢山居ることなんて
私にわ思いつかなかった。

そう感じてしまった私わ思い立ったらすぐ考えなしに

あなたの車椅子を押していた

外に向かって

あなたわびつくりして私の顔を振り返った
何故か私わにつこりあなたに向けて笑った
そのとたんあなたわ車椅子に前向きに座り
つれて行ってつていうように

黙って座っていた

私わやつぱり外に行きたいんだと確信して
あなたを病院から連れ出してしまった

自動ドアから外に出て

すぐ目の前の海が良く見渡せる高台
すぐ戻るつもりだった

あなたの隣にしゃがみこんで私も海を見た
海からの風が気持ちいい
あなたを見てみると

病室でみたのが嘘のように気持ちよさそうな横顔がある

かすかに頬が赤味がかっていたのわ

夕日の加減だったのかもしれない

あなたがこころなしか嬉しそうで私わ後先も考えず有頂天になっていた

ふと目を落とすと

海のそばらしく地面の砂が浜のすなみたいにさらさらなのに

黄色い花がまるで絨毯のように咲いている

ずっと前ママに教えてもらったことがある

月見草だと・・・

綺麗だな。。。と思っていたとき

われに返った私

どれくらいここにいるんだろう？

戻らなきゃ

あなたの車椅子を押して急いで病院に戻る

息はずませながら自動ドアにはいつていく私たちを

看護婦さんが慌てて呼び止める

「どこにいったの？」

探していたことわ間違いない

私わ言葉もなく泣きそうな顔になっていた

看護婦さんからどんな言葉で叱られたのかなんて覚えていない

それより何より

あなたにとつて良くないことをしてしまったのだという

ただ漠然とした事実が私を押しつぶしそうだった

そこに

あなたのお母さんが飛んできた

涙があふれてあなたのお母さんがぼやけてた

やつのことで私わ口を開いた

「ごめんなさい・・・お外に行きたいんだって・・・思ったから連れて行ってあげたかったの」

その言葉が終わったとたん

あなたのお母さんが何も言わずにぎゅっと抱きしめてくれて私の耳元でそつとささやいてくれた

とても小さい涙声で。。。

「ありがとう」

私わ大きな声で泣き出した

何度も何度も

「ごめんなさい」

を繰り返して

あなたのお母さんわいけないことをした知らない子にとても優しくかった

ちよつとした騒ぎにわが子居ることに驚いて

ママが走ってくる

看護婦さんに説明をされて

ひたすら娘のしたことを謝っているママがかわいそうで優しくしてくれるあなたのお母さんに悪くて

自分が嫌いになっていた

騒ぎが収まり私わママに手を引かれ病院を後にした

車の中でママわ何も言わない

怒られるとばかり思っていたのに

何も言わない

私わその静けさがいやで

重い口を開いた

「ごめんなさい」

ママわ予想がいかに私に笑顔を向けた

「あの子をお外に連れて行ってあげたかったんでしょ？」

うなずく私にママわ

「もうしちゃいけないってわかったもんね！」

そういつて後わ黙って家までの道をひたすら運転していた。私わママが私のことを理解してくれたことが嬉しかった。

それから私わ

病院へ行くことをためらっていた

あなたに会うこともあなたのお母さんに会うことも怖かったからなの。。毎日あなたのことばかり考えていた

今も窓の外の何かを見つめているんだらうか？

元気になってるんだらうか？

いつかまたあの場所であえるんだらうか？

それから何度かママわ病院に行っていた

私わ何も聞かなかったしママも言わなかった。

ママの気遣いが嬉しかった

そんな時叔父の病状が急変したとの連絡がきた

私も一緒に病院に行った

どれくらいぶりだらうか

あなたに会いたいという気持ちと、会いたくないという気持ちが入り混じって複雑な思いと、

叔父がどうなってしまったのかという不安が私の中で

大きくなっていく。

ママわじつと前を向き

何かを見つめているように感じた。

あつという間に病院に着き

今日わママに従い叔父の病室へと一緒に向かう

叔父の病室の前にわ

ママの兄弟や私の従兄妹達があふれていた。

みんな泣いている。

その涙の理由をすぐに知らされたママと私

叔母が言う

「ついさっきだったの・・・仕方ないわ・・・」

ママが声もなく泣き出して叔父の病室に入っていく

私わ現実を受け入れることが出来なかった

信じられない

だってほんの一月前叔父わ笑っていたのに
私の中の何かが弾けた

「いや~~~~」

病院だということも忘れて

叔父の病室に入ることとせず

私わ走り出した

どこに行こうなんて考えてもいなかったのに

涙で前がくもってどこをどう走ったかもわからなかったのに

立ち止まったのわあなたの病室の前だった

しゃくりあげながらあなたの病室の前から

あなたのベットを伺う・・・

あなたわいない・・・

どこにいるの。。

すぐるような気持ちだった。

じつとあなたの病室を見つめる

ん・・・

この前と様子が違う」ことに気づく私

サイドテーブルの上にあった小物たちも

あなたのお母さんがいけたのか

置いてあったお花の花瓶もない

ベットわきれいにかたずけてある

窓が大きく開けられて白いカーテンが海からの風でゆれている。

あなたに何が起こったのかわからず

私わ不安になった叔父のことと忘れて

私わあの窓に走った

いない・・・

外へ急ぐ・・・

いない・・・

どこにもあなたがない

泣きそうになるのを必死でこらえる
きつと病氣」が治って退院したんだと自分に言い聞かせた
気持ち落ち着かせようと深く息をして
私わもう一度あなたの病室へと向かった
ゆつくりと

あなたが窓を外をじつと見つめてる姿を思い出しながら

病室わやっぱり空っぽだった・・・

廊下からあなたのベットを見つめる

ただボーっともう一度会いたかったなとおもいながら・・・

私がそんな夢の世界に迷い込んでいたときだった。

あなたのお母さんが遠くに見えた

あなたのお母さんも私に気づいたらしく

私のほうにゆつくり歩いてきた。

私わ動こうともしないで

ただボーっとしている

視線だけわあなたのお母さんを見つめ

きつと退院したと話してくれると信じて・・・

私の背にあわせてしゃがみこみ

あなたのお母さんわ優しく話しかけてくれた

「この前わありがとう・・・あの子のあんなに嬉しそうな顔久しぶりに見たの。」

私わ言葉もない

悪いことをしてしまったはずなのに・・・

この優しさでいっぺんに必死に抑えていた涙があふれる

あなたのお母さんわ困ったように

「ごめんなさい・・・怒ってるわけじゃないのよ。」

うなずくのがやっとの私にあなたのお母さんが続けて話す

「昨日ね・・・あの子が遠くに逝っちゃったの・・・」

私わ何をいつてるのかわからなかった。

どこにいるのかあの窓にいるはずだもん

あの高台で気持ちよさそうにどこかをみているはずだもん
言葉が出ない

ただ声が大きくなって涙がどんどんあふれる

あなたのお母さんが

私をこの前のようにぎゅっと抱きしめてくれた

あなたのおかあさんも泣いている

そして、私にこういった

「あの子の為に泣いてくれてありがとう・・・あのこの分まで生きて・・・」

私わあなたのお母さんをふりきって

走り出していた

廊下が長い泣きすぎて声もかすれて。。。息も苦しい・・・

病院の自動ドアをすり抜けて

たどりついたのわ

あの高台

私わぺたつと座り込み

ただ泣いた・・・

もしかしたら私があなたを連れ出したから

あなたが生きていられなくなっただんじやないだろうか・・・

自分を責め続けた

何で叔父もあなたもいなくなってしまうっただんじやろう

私わここににいるのに・・・

何ですつと一緒にいられなかったんだらう

こんなに会いたいのに・・・

後悔ばかりが私の中に浮かんでくる

私わ自分が嫌いでしたかった

どれくらい泣いたのか自分でもわからなくなってボーっとしていた
私の隣に

ママが座った

ママが言う

「あらーすごい月見草・・・こんなに沢山咲いてたの気がつかなかった。」

私わただボーっとしたまま聞いている

「ねー・・・きつと天国に行こうね。」

えっ・・・

私わびつくりした

人が死んだら悪いことしない限りみんな天国にいくんだと思っていたから

ママが続ける

「あまりに悲しくて・・・あまりにつらくて・・・人わときどき自分で自分を死に追いやってしまうの。」

意味がわからない私わポカーンとしながら、ママの言葉をまっっている
「でもそうするとね・・・先に逝って待っていてくれた人たちに会えないんだって。」

やつとのことで言葉がでる私

「そうなの?。」

お互い泣きはらした目で話が続く

「ママわおじちゃんにやっぱり会いたいの。だから、生きなきゃ。」
そういつて力なく笑う

私も同じだと思った

いつも優しくかった叔父にもそれから、何回かしか会ってないあなたにも

また会いたい

そう思った。

私もママに言う

「ママ・・・私も一生懸命生きたらきつとまた・・・あえるの?。」

ママわ私の横から私の肩にそつと腕をまわして抱き寄せて

「うんうん。きつと迎えにきてくれる・・・私たちがやらなければならぬ何かを、やり終えたときお疲れ様って迎えにきてくれるから・・・だから・・・その日までがんばろうね。」

あんなに泣いたのが嘘のように

二人で笑った

月見草が優しく包んでくれたのわ

叔父とあなたがそばにいてくれたからかもしれない・・・

叔父の葬儀がめぐるしくすすんでいく

火葬場で叔父が焼かれていくその待ち時間

私わ夏の真つ青な空を見上げていた

叔父が煙になって、どんどん空に上っていく

「さよなら。」

心の中で何度も言う

なんとなく叔父とあなたが空の上で笑っている気がする・・・

私わ今日何年かぶりに

この病院に来ています。

あの頃と違うのわ時が流れて、私が大人になり

ママが一緒じゃないことくらいかもしれない

この場所にわあの日のように

月見草が咲いてます。

そして、あの日と変わらない夕日と心地よい浜風

私わ私なりに一生懸命生きてます。

あなたに会えるように・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4224d/>

月見草

2011年1月6日10時37分発行